

福島浜通りと首都圏の中高生による参加型対話の課題と成果

(2) 甲状腺検査を巡る中高生による「白熱教室2016」—中高生の発言と意義—

Agendas and Issues of Participatory Dialogues by Junior-High and High School Students from Fukushima
Hama-doori and Capital Area

(1) "Exciting Class 2016" by Junior- and High Students on Thyroid Screening Test- Students' Statements and their Significance -

*木村 菜摘¹, 中山 知恵子², 澤田 哲生³

¹東北大, ²神大附属中高, ³東工大

中高生は未知の問題に共考から協働への道を見出すべく意見交換を重ねた。主な発言は、甲状腺検査をなぜやっているのか全く知らされていない。仲間や学校で話す機会がない。何をどのように考えていいかわからないなどであった。その中から挑むべき問題の輪郭が見え始めてきた。

キーワード：白熱教室，甲状腺検査，対話，共考，協働

1. 緒言

『白熱教室2016』を実施した。ファシリテーションでは中高生に視座を合わせるよう注力した。浜通りから参加した3名の高校生がまず問題提起をし、それを起点に参加型対話を進めた。約3時間の対話により共有すべき「公共性のある論点」の輪郭が浮かび上がってきた。

2. 目的と方法論

2-1. 目的

問題提起を起点とし、参加型対話によって、数項目の公共性のある論点を抽出することを目的とした。

2-2. 方法

場のデザインで示された(1)中高生の自主性の支援、(4)共考による相互信頼の構築のために、ファシリテータを含む参加者は車座になり、男女差・年齢差・地域差が偏らないように着座した。論点出しはKJ法で行い、一般参加者も参加した。

2-3. 主な発言とその意義

起点となった3高校生の意見は：①このような機会が欲しかった、②地元の日常では言えないことがある、③なぜ甲状腺検査を受けているのか知らない、④自分達が普通に生活していることを広く知ってほしい、⑤福島の実情を知らないままデモなどの行動を起こさないでほしいなど。これに対して、首都圏の中高生からは、次のような発言があった：(1)福島の人が何を知ってほしいのかを知りたい、(2)福島の人達よりも自分達の方が感じている不安感が大きいのだと気がついた、(3)甲状腺検査を受ける理由を知らないまま受診しているというのは意外であった、(4)自分達の健康以上に福島に対する風評被害について心配しているように感じたなど。KJ法による論点出しと親和性分類によって3つの問題群が見えてきた。1つ目は放射線についての知識を得るための授業が必要なのではないか、2つ目は甲状腺検査を受ける意義がしっかりと説明されていないのではないかということ、3つ目は福島の実情を知ってもらうために何ができるのかということ。参加型対話の中で、男女差・年齢差・地域差を意識せず、知識と認識の差を超えて相互信頼を構築しながら「共に考える」ことが可能になった。そのことは、参加者の「楽しい」「もっと時間が欲しい」「甲状腺検査を深く知りたくなった」「浜通りに行ってみよう」という声に現れていたと考える。

3. 結論

『白熱教室2016』では、試行錯誤の中ファシリテーションを重ね、参加した中高生が対話から初めて、相手の立場に慮って共に考えるという「共考」の実践にまでこぎ着けることが出来た。つまり、対話と共考を経て、協力して公共性のある論点を削り出すという「協働」への道筋が拓かれたと考える。

* Natsumi Kimura¹, Chieko Nakayama² and Tetsuo Sawada³

¹Tohoku Univ., ²Kanagawa Univ. High, ³Tokyo Tech.